カリキュラムにみる初期シカゴ学派
——1905年から1930年まで——

高　山　龍太郎

はじめに

1892年10月に開校されたシカゴ大学は、世界初の社会学の学部と大学院を持ち、社会学の制度化に大きな役割を果たした。このシカゴ大学社会学部では、1920年代から1930年代前半にかけて、シカゴ市をフィールドとする経験的調査が旺盛に行われた。その結果をもとに出版された大量のモノグラフは、現代においてもなお、多くの社会学的洞察を与えてくれる知的遺産として高く評価されている。1925年当時、全米の社会学の大学院生数のうちおよそ三分の一がシカゴ大学の所属であったという。彼らは、高等教育の拡大期にあったアメリカ全土の大学・研究機関へ巣立ち、各々の赴任先でシカゴ・スタイルの社会学を広めていった。したがって、シカゴ大学における社会学教育を知ることは、その後のアメリカ社会学の流れを理解する上で大変重要である。

本稿では、当時の学生便覧に記載されていた授業科目名・担当教官・授業概要[1]を資料に用いて、社会学部のカリキュラムの変遷を検討していく。今回分析を行った25年間の教育方針は、以下の三期に分けることができる。まず、第一期は、1905年から1918年までである。この時期の教育方針は、ハルハウス(Hull-House)に代表される社会改革の諸団体に参加することを通して、社会学の研究者として必要な技能を学生たちに学ばせようとするものであった。しかし、第一次世界大戦に伴うハルハウスの創設者ジェーン・アダムズ(Jane Addams; 1860-1935)の権威失墜によって、こうした教育方針は挫折する。アダムズと親交の深かったトマス(William Isaac Thomas; 1863-1947)が、政治的スキャンダルによって1918年にシカゴ大学から追放されたことも、シカゴ大学の脱政治化に拍車をかけた。続く第二期は、1919年から1926年までである。その中心を担ったのが、シカゴ学派の基礎を確立したと言われるパーク(Robert E. Park; 1864-1944)とバージェス(Ernest Watson Burgess;

[1]用いた資料のリストは、巻末に付した。社会学部の授業科目などの案内は、毎年、10ページ程度記載されている。また、各々の授業科目の概要は、3行から10行程度で説明されている。

1886-1966)である。彼らは、「科学としての社会学」という旗印の下、自らの手によるデータ収集とデータを解釈する理論的枠組の重要性を強調し、学生たちのフィールド調査を積極的に推進していった。この時期、彼らの指導のもとで書かれた博士論文の一部が、シカゴ大学出版局より出版され、多数のモノグラフを産出したいわゆる「シカゴ学派の黄金時代」を形成する。最後に、第三期は、コロンビア大学からオグバーン(William Fielding Ogburn; 1886-1959)が赴任した1927年以降である。彼は、シカゴ大学社会学部に、より高度な統計的手法をもたらした。これ以降、統計を用いた方法論的な厳密性がいっそう追求されていくようになる。

上記の三つの時期について詳しく検討する前に、以下では、まず、シカゴ大学社会学部設立の経緯について簡単に振り返っておきたい。

シカゴ大学は、教育目的を「研究者養成」におく研究中心型の大学として発足した。シカゴ大学に社会学部を作るという決定は、初代学長ハーパー(William Rainey Harper)の強力なイニシアティブによってなされた。ショトーカ(Chautauqua)運動(2)を通して多くの指導的な社会科学者たちと面識を得ていた彼は、社会問題の解決に「科学的」知識の応用を求める俗に「社会学運動」と呼ばれる運動が、大学においても促進されるべきだと考えていた。

このハーパーが、社会学部長として赴任を要請したのが、コルビー大学の学長であったスモール(Albion W. Small; 1854-1926)である。当時の進化論的な社会学理論を研究し、ドイツ歴史文献学における批判的な科学的方法に詳しかったスモールは、歴史社会学・現代社会学・建設的社会学から成る社会学部を編成しようと考えていた[Diner 1975: 519]。彼は、自らの目指す社会学を、次のように規定している。「社会学は、同時代の社会を研究すべきである。近代社会の研究は、文書の研究を通して行なわれるだけでなく、直接体験によって行なわれるべきである。社会学は、実際の諸問題を中心に置かねばならない。社会学は、包括的な理論に依って、資料が許す限りで厳密に科学的な方法を用いる知的な学問分野にならねばならない」[Diner 1975: 521]。

1　第一期：社会改革運動を通しての教育

社会改革運動への参加を通して教育が行われた第一期は、ハーパーとスモールの社会学

(2)1874年にニューヨーク州ショトーカ湖畔で始まった大衆教育運動。当初は、サンデー・スクールの教師たちの質を向上させるための夏期学校であったが、やがてあらゆる種類の社会人教育を含み、冬期にも行われ、全国に組織が形成された。

構想が体現されていた時期といえよう。多くの教員と学生が、急成長を続けていたシカゴという大都市の諸問題に積極的にかかわっていた。この時期に社会学部の中心を占めていたのが、スモール、ヘンダーソン(Charles Richmond Henderson)、ヴィンセント(George Edgar Vincent)、トマスといったシカゴ学派第一世代である。

授業科目の紹介に先だって、まず、社会学部の位置づけを見ていきたい。

「この学部に割り当てられた仕事は、一つには、人間のアソシエーションに関する一般的な過程を研究することであり、もう一つには、行為の原理を研究することである。こうした原理は、一つの全体として考えられている社会的な関係について既に確かめられた知識によって指摘されている。

この二重の課題は、次のことを含意している。一つには、社会学部が、心理学を含む歴史グループにおける他の諸学部の方法と成果に大きく依存しているということである。二つに、それとは逆に、歴史グループにおける個別的な科学は、社会学が自らの仕事として研究する一般的な社会関係の意味と相対的な重要性に関する仮定に大きく依存しているということである。

文化人類学・民族学の科目が社会学の科目と組み合わされていることは、暫定的なことにすぎない。人類学の科目と社会学の間にある論理的な関係が、社会学の科目と他の個別的な社会科学との間にある論理的な関係と異なる、ということを暗に意味するものではない。社会学部によって提供される課程によって、学生は、人間の進歩の歴史に関する一般的な概念を得ることができ、人類の諸人種を概観することができ、先史時代の原始人たちによってなされた起源を研究することができ、これらの主題を調査するのに必要な方法を身につけることができるのである。

シカゴ大学における社会学的研究のための施設は、他に比類するものがない。社会現象に専心した学部の分化と学部間の分業が明確で詳細なところは、ここにおいて他にない。シカゴという都市は、世界において最も完全な社会的実験室(social laboratories)の一つである。社会学の諸要素は、より小さなコミュニティにおいても研究できるだろうけれども、また、初学者にとっては、最初は、より単純な社会的な結合を、実証的な社会学の方法によって扱うほうが有利であろうけれども、だが、近代社会における最も深刻な諸問題は、大都市によって示されており、多数の人びとのなかで具体的な形で出会うものとしてそれらを研究しなければならない。非常に多様な典型的社会問題を示している都市は、世界でシカゴをおいて他にない。

社会学部の教員は、学問的な目的と実践的な目的の両者に対して科学的な資料の利用を目指している。教員は、調査の機会の多くを、公共的精神を持つシカゴの男性・女性たちとの共同

のなかに見出している。教員は、シカゴにおける生活を調べ形づくることを目指す多くの市民組織の積極的なメンバーである。社会学部の大学院生たちは、社会的事実のなかで作業することを教わり、経験によって理論を検定し形成することを教わるのである。

したがって、シカゴの組織化された慈善事業は、シカゴ大学の大学院生たちに雇用と訓練の両者を提供するのである。シカゴ市の教会の事業も、同様の方法で学生たちの賛助を得ている。社会学の学生の数名は、ハルハウスで暮らし、働いてきた。ハルハウスの計画に基づくソーシャル・セツルメントは、シカゴ大学の学生と教員によって設立され維持されてきたのである。労働組合から市民クラブにいたるあらゆる種類の社会組織が、あらゆる種類の近代的な社会実験の実例を提供し、非常に多様な観察と経験の機会を与えてくれる。社会的努力のあらゆる位相における代表者たちは、こうした社会的努力を社会学の学生の訓練に寄与させる点で、誠意をもって社会学部に協力してくれている。シカゴ大学が位置している巨大な社会的実験室によって提供されるすべての利点を最大限利用することがこの学部の目的である。」[Annual Register of the University of Chicago, 1904-1905.: 205-206.]

ここでは、大学がシカゴに立地していることが、世界に例がないほどにすばらしい研究上の利点であると強調されている。彼らは、自分たちの大学の研究施設が優れていることのみならず、それ以上に、当時のアメリカ第二の大都市シカゴを「社会的実験室」と呼び、近代社会の諸問題を研究する上で格好の素材を提供してくれると力説するのである。例えば、学部長のスモールは、「シカゴという都市が構成している巨大な社会的実験室において私が学んだ最も印象深い教訓は、思索(speculation)ではなく、行動(action)が、最上の教師であるということだ」と述べている[Small 1896: 581-582]。この「社会的実験室」という言葉は、パークの名前とともにしばしば語られるが[Park 1929]、第一世代の時代から既に多用されていたのである。

シカゴ市と社会学部を結びつけているものが、ハルハウスに代表される社会問題の解決を目指す諸団体である。1889年にジェーン・アダムズ[cf. Deegan 1988; 1991]によってシカゴの貧民街の中心に創設されたハルハウスは、社会改良主義・人道主義的な奉仕活動を行なうセツルメント・ハウスである。アダムズは、こうした功績により、1931年にノーベル平和賞を受賞した。このハルハウスには、シカゴ学派の第一世代も深く関与する。スモール、ヘンダーソン、ズーブリン(Charles Zueblin)、ヴィンセント、トマス、ミード(George Herbert Mead; 1863-1931)といった人びとは、ハルハウスをしばしば訪れ、講義などを行なっていた[Deegan 1988: 324]。逆に、アダムズも、シカゴ大学の公開講座において授業を行っ

ていたし、シカゴ大学の教員に加わるオファーを受けていた。また、アダムズは、1905年に設立されたアメリカ社会学協会(American Sociological Society)の中心的なメンバーでもあった[Deegan 1988: 10]。当時のシカゴ大学社会学部の教員たちにとって、セツルメント活動を行っていたアダムズは、志を同じにする同僚であった。スモールは、「学者は、社会を改善・改良する計画や方策を完成させ応用する仕事に積極的に参加していることを主張することによって、学者であることと市民であることの両者を高めることになるだろう」[Small 1896: 581]と述べている。こうした考え方は、自らも社会改良を目指す団体と密接に関わっていた初代学長ハーパーの「社会学運動の学問化」構想にも合致する。その一方で、学生たちは、社会改革の実践的活動を通して、直接自らの肌で都市の現実を学び、社会に対する理論的考察を深めていったのである。

それでは、1905年度のカリキュラムを見ていこう。文化人類学の科目を担当していたのは、1892年の学部創設時のメンバーであるスター(Frederick Starr)である。スターの講義は、人気があったが、彼は、長期の調査旅行でしばしば大学を留守にし、大学の事柄にほとんど関心を持たなかった。文化人類学が、社会学に著しく貢献し始めたのは、1923年にスターが引退し、後任にコール(Fay-Cooper Cole)がやってきてからだという[Bulmer 1984: 39-40]。スターの担当していた人類学の科目は、概論的な科目と、特定の人種・民族を取り扱った科目とに二分できる。特定の人種・民族を扱った科目では、「日本」という科目が開講されている。

次に、トマスである。彼は、社会の起源から現在の社会の姿をたどるという発生学的な授業科目を担当していた。1896年にシカゴ大学で博士号を取得したトマスは、非常に多才な人間で、テネシー大学の学部時代には、ギリシャ文化や自然史に関心を持ち、大学院では英文学と近代言語を専攻した。その後、ドイツに留学し、古代英語・古代フランス語・古代ドイツ語を研究すると同時に、民族心理学・民族学に強い関心を持つようになる。アメリカ帰国後、スペンサーを通して社会学への興味をつのらせ、シカゴ大学に入学、1895年からは、教授陣に加わっている。それでは、トマスの担当した科目を個々に見ていこう。特にその起源と関連づけながら社会学的な検討を行なう「芸術と芸術家階級」、原始時代や部族生活におけるアソシエーションや文化を探る「社会の諸起源」、個人と社会的活動に対する精神の関係を発生学的に研究する「人類における精神の発達」、結合・社会的活動・社会構造の諸形態の発達における性という事実の影響力を検討する「社会の組織化における性」、原始的な司法・政治システムと社会的因習の研究を行なう「原始的な社会的コントロール」、「職業の起源と心理」、「アフリカとアメリカにおける黒人」、の合計

7科目である[3]。

次に取り上げるのは、社会学部創設時のメンバーであるタルボット(Marion Talbot; 1858-1947)[cf. Deegan 1991]である。彼女は、家政学の先駆者であり、「家の衛生」「食物供給と食事療法」「家の管理」「世帯管理における近代的問題」といった科目を担当している。1904年に家政学部ができると、タルボットは、家政学部の所属となる。

ヴィンセントも、主にスモールとデューイ(John Dewey)の指導の下で、トマスと同じ1896年に博士号を受けている。スモールとともに教科書『社会研究入門』[Small and Vincent 1894]を著わしたヴィンセントは、初学者向けの「社会研究入門」「社会学入門」という科目を担当している。この他に、彼は、現代社会の諸問題を扱う科目を担当し、社会問題研究の具体的序論と社会科学の相関を目指した「合衆国における現代社会」と、都市に特殊な諸問題の研究を基礎づける「アメリカの諸都市」を開講している。また、彼は、「世論」という社会心理学の科目や、「新聞の発展と組織」という新聞記者を養成する科目も担当している。

社会改革色の強い科目を担当しているのは、社会学部創設時のメンバーであるヘンダーソンである。バプティストの牧師だった彼は、慈善行政(charity administration)の専門家としてシカゴ大学に赴任してきた。シカゴの慈善団体に深く関与していた彼は、社会福祉における大学とシカゴ市の結びつきを強化し、また、宗教的信仰に基づいて社会問題に経験的にアプローチすることによって、トマスやバージェスといった若い研究者たちの都市への関心を育んでいった[Bulmer 1984: 35]。彼のゼミナールの名前は、「社会改良の方法」というまさに彼の関心を表わしたものである。この他に、彼の担当した社会改革色の強い科目としては、教会がコミュニティの福祉に尽力する方法を論じる「教会社会学」や、虐げられた階級の性質と起源、救済の原理と方法、善行の組織化を研究する「現代の慈善」、「歴史的発展のなかの博愛主義」などがある。また、彼は、「農村コミュニティ」「都市コミュニティ」という地域社会学の科目も担当している。「宗教教育の組織」という科目は、牧師でもあるヘンダーソンの担当であった。

それでは、最後に、学部長だったスモールが担当していた科目を見ていこう。彼は、主に、社会学理論と学説史を担当している。コントから現在までの学説史を扱う「社会学的方法の発展」という科目では、これまでの社会学の代表的文献を用いて、一貫した社会学的問いの発見が目指される。そして、この発見された経時的な社会学的問いに基づいて、

---

[3]このうち、「社会の組織化における性」、「原始的な社会的コントロール」、「職業の起源と心理」の3科目は、1905年度には、開講されていない。

社会学の課題と、社会学とその他の個別的な社会科学との関係を検討していくのが「社会問題の方法論」である。また、「一般社会学の概観」という科目では、社会学のシステムへの序論が講義される。そして、ここでの知見に基づいて、一般的な社会過程の観点から現在の社会状態を説明していくのが「近代社会における諸階級の闘争」という科目である。さらに、この二つの科目の結論となるのが「社会学の倫理」という科目で、そこでは、行為の原理がいかに社会関係に基づいたものであるかが示される。スモールは、民主主義にも深い関心を持ち、「近代民主主義における社会力」という科目において、社会学的分析の方法を用いてアメリカ・イギリス・フランス・ドイツの比較を行ない、民主主義の特別な形態・精神・内容を明らかにしようとする。

2　トマスの貢献と解雇

次に、1905年から9年ほど経った1914年のカリキュラムを見ていく。1914年になると、科目が、初級・中級・上級の三つのコースに分けられる。さらに、上級コースは、「一般社会学」「社会心理学と人種心理学」「社会技術」「文化人類学と民族学」という四つのグループに分けられた。このカリキュラム編成は、1923年まで続く。

1914年のカリキュラムで注目すべきは、主にトマスによって担われていた「社会心理学と人種心理学」グループの諸科目である。シカゴ学派の歴史は、パークとバージェスの名から始まることが多い。しかし、その基礎を作ったのは、トマスである[Cavan 1983]。このトマスが主に担当していた「社会心理学と人種心理学」グループの説明には、トマスの主要な研究関心が現われているのと同時に、現在、シカゴ学派再考の文脈において重要視されている(1)質的な社会学、(2)エスノグラフィックな方法論、(3)シンボルを介した相互作用、という基本要素が含まれる。

> 「社会心理学と人種心理学の諸科目は、一見したところ関係のない多様な主題が扱われているけれども、ひとつの体系的な性格を持っている。これらの科目の目的は、以下の通りである。(1)(a)基本的な社会的態度・習慣・行動様式という諸要素に分析する方法の定義と例証、(b)人種的・個人的な気質や性向(aptitudes)を確定する方法の定義と例証。(2)社会的相互作用の諸過程の記述と説明、(a)その諸過程によって、個人や個人の集団が、自己意識に達し、道徳的差異と個性を獲得し、また、(b)その諸過程によって、個人の社会的態度（感情、習慣、技術）が、修正・一般化されて、慣習・因習・伝統の形で、前の世代から次の世代へ、一つの人種・民族・

文化集団から別の集団へ伝達される一つの社会的遺伝(social inheritance)となる。(3)伝記や、手紙、心理分析的記録、その他の詳細なドキュメントや内的生活の表現を媒介として、個人や孤立した集団に現われるより多様な人間行動のタイプを探索し、伝統的な抑制・社会的圧力・職業的関心が自然的な性向と気質に及ぼす影響力と、個人の性格や集団・人種・民族の性格的特性の形成におけるこれらの諸要因の関係を確定する。」[Annual Register of the University of Chicago, 1913-1914.: 162-163]。

このように、現在の我々がシカゴ社会学と考える社会学は、まず、トマスによって学生たちに教授されていた。トマスの影響力としてしばしば『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』[Thomas and Znaniecki 1918-20]（以下、『ポーランド農民』）が強調されるが、シカゴ社会学の祖型である彼の研究スタイルは、その1918年の出版以前から、授業を通して学生たちに伝えられていた。例えば、『ポーランド農民』の原型となったと思われる「移民」という科目は、1909年に開講されている。

さらにトマスの担当していた科目を見ていこう。1905年から引き続き1914年も開講されている科目は、「社会の諸起源」と「人類における精神の発達」の2科目だけである。これは、トマスの担当が、発生学的な科目から社会心理学的な科目へ移ったことを示している。それを端的に表わしている科目が、この1914年から開講された「社会的態度」(4)と「逸脱類型の心理学」(5)である。後者の「逸脱類型の心理学」は、1917年に、主に個人的解体を扱う科目として「解体論」(Theory of Disorganization)と改称される。1914年における、トマス担当の逸脱関連の科目は、「ユダヤ人」と「売春」である。また、1917年には、フィールドワークを用いた調査法を教える上級学生向け科目「調査コース」を開講している。こうした一連のトマスの授業が、シカゴ大学の「黄金時代」を担う学生たちを鍛えていったことは、想像に難くない。

---

(4)「要素的な本能と衝動。気質と性格のタイプ。個人や集団における抑制(inhibition)の性質。社会的態度は、この抑制を通して発達し固定される。人種偏見、自民族中心主義、威信。社会のよりフォーマルで教訓的・因習的な道徳的規則と対照をなす、個人において進行している私的な道徳生活の決定。様々な人種、歴史的な時代、社会的階級におけるモーレスの比較。民族誌的な資料、自伝や、その他の個人的(personal)ドキュメントの利用。」

(5)「反社会的でいかがわしく、心的に逸脱し、社会的に孤立した個人と集団の研究。これらの逸脱した人びと、未開の人びと、近代の習慣的な人びととの間にある対照。犯罪とその他の反社会的表現の、これらの逸脱的な諸傾向(predispositions)に対する関係と、これらの諸傾向が近代社会の組織化において出会う緊張に対する関係。こうした事柄に関して、(1)ジプシー、パリア、『貧しい白人』、ロシア人の『乞食コミュニティ』の考察と、(2)放浪者、ホボ、犯罪者、売春婦、軽愚者、天才の考察。」

しかしながら、このようなシカゴ大学社会学部におけるトマスの中心的役割は、1918年のトマス追放劇によってその幕を閉じる。1918年4月12日、トマスは、マン法[6]違反と偽名によるホテル宿泊という容疑で連邦捜査局に逮捕される。シカゴ大学学長のジャドソン(Harry Pratt Judson)は、4月15日に、トマスの停職を決定し、2日後の17日には、彼の解雇を決めた。トマスの逮捕から解雇まで、わずか5日である。しかし、彼は、無実であった。解雇の決定がなされた3日後、トマスに対する告訴が、すべて取り下げられる。[Deegan 1988: 178-186]。

ジャノビッツ[Janowitz 1966: xiv]が指摘しているように、このトマス追放劇には、トマスの妻の平和運動が一因であったと言われている。時は、第一次世界大戦の最中である。アメリカ国民は、愛国心と道徳的規律に敏感であった。同じく、平和運動に深くかかわったアダムズが、1915年頃を境に、貧民たちを救済する「聖女」から、国益を妨げようとする「悪人」とされたことからも、この推測は、かなり的を得たものと言えよう。トマスは、このアダムズと、夫婦ぐるみで親密なつきあいをしていた。アダムズは、何年もの間、火曜日の晩はトマス家で食事をするのを常にしていたという[Deegan 1988: 129]。トマスも、アダムズと同様に、地域社会の改善に関心を持ち、売春問題・黒人教育・セツルメント運動・女性参政権の問題にかかわってきた。トマスとズナニエツキの『ポーランド農民』は、社会学を法則定立型科学と定義したことで有名である。しかし、その一方で、社会学理論と社会的実践の相補的関係を強調している[7]。トマスは、社会的実践を通して社会に対する理論的考察を深めようとするのと同時に、その理論的考察を社会の改革に還元しようと試みていた。

しかしながら、こうしたトマスの構想は、無実の罪によるシカゴ大学追放によって挫折に終わる。彼の不当な解雇に対して公式に抗議を行った同僚は、一人としていなかった。学部長のスモールは、トマスに対して個人的な支援を行ったとされるが、彼もまた、政治的攻撃を恐れた一人である。スモールは、授業において、あらかじめ準備してきた長く単調なノートを、一字一句違わずに読み上げていた。学生がその理由をたずねたとき、スモー

---

[6]「不道徳な目的」のためにある州から別の州に女性を運んだり、運ばせたり、何らかの方法で現場幇助をした場合は、5000ドル以下の罰金、もしくは、5年以下の懲役、もしくは、その両方。Mann Act は、通称で、正式の法律名は、White Slave Traffic Act。連邦の法律である。

[7]「こうした究極的な実際的応用可能性の要請は、実践にとって重要であるのと同様に、科学それ自身にとっても重要である。それは、社会科学の実際的な価値のテストであるだけでなく、理論的な価値のテストでもある。結果を応用することの可能な科学は、そのことによって、本当に経験に基づいていることを証明し、非常に多様な諸問題をとらえることが可能であることを証明し、その方法が本当に正しいことを証明し、自らが妥当であることを証明する」[Thomas and Znaniecki 1918-1920: 16＝訳書17]

ルはこう答えた。「自分自身を守るため、授業で自分が話したことを証明するために、このノートを準備して、それを忠実に読み上げているのだ。このノートは、自分の受講生たちに私が何を話したかの証拠だ」[Deegan 1988: 83]。また、1912年には、先に引用した学生便覧の社会学部の位置づけにおいて、ハルハウスとシカゴ大学社会学部の結びつきをうたった部分が全面的に削除された。社会問題に対して積極的に発言していたズーブリン[8]が、1908年にシカゴ大学から解雇され[Deegan 1988: 177-78]、さらに、社会改革色の強い授業科目の多くを担当していたヘンダーソンが、1915年に亡くなり、そして最後に、1918年にトマスが解雇されたことによって、第一期における、社会改革活動への参加を通して、学生たちにシカゴ市の現実を触れさせ、そこから社会学的考察を引き出させるという教育方針は、その幕を閉じるのである。

3 第二期：パークとバージェスによるフィールド調査の推進

第二期の中心を担ったのは、パークとバージェスである。シカゴ学派の第二世代と呼ばれる彼らは、社会学の科学性を主張することによって、社会改革色の強かった第一次世代との区別をはかろうとした。その際に強調されたのが、自らの手によるデータ収集とそのデータを解釈する理論的枠組の重要性である。彼らの指導のもと、多くの学生たちが、フィールド調査を積極的に推進していった。

まず、1915年のヘンダーソンの死と1918年のトマス追放による科目担当の変更を見ていこう。

ヘンダーソンの科目をいくつか引き継いだのは、1916年から教授陣に加わったバージェスである。彼もまた、シカゴ大学から1913年に博士号を受けた。これらの科目には、1916年から担当した「家族」が含まれる。家族社会学において大きな業績[Burgess 1926; Burgess and Locke 1945]を残したバージェスは、この「家族」で、家族成員の個人的発展とコミュニティのモーレスという二つの観点から近代家族の諸問題が検討する。特に、近代文学に表れる家族の理想像や事例研究を用いることによって、(1)自然的家族、(2)制度的家族、(3)家庭、(4)解体と不統合、(5)家族の未来、という五つのトピックを扱う。この「家族」の他には、家族や近隣の環境に特に注意を払いながら人間性(human nature)と社会

[8]ズーブリンは、アダムズと関係が深く、アダムズを中心に編集された『ハルハウス地図と文書』[Residents of Hull-House 1895]に、ユダヤ人コミュニティに関する「ゲットー」という論文を寄稿している。

的コントロールという観点より犯罪者の事例研究を行い、犯罪に対する様々な社会的措置を比較研究する「犯罪の社会的処置」と、「慈善事業の組織化と管理」「現代の慈善」がある。しかし、後二者の社会改革色の強い科目はまもなく廃止された。

トマスの後任として赴任したのは、デューイ、ミード、エンジェル(James Rowland Angell)の指導の下、1914年にシカゴ大学心理学部で博士号を取得したフェアリス(Ellsworth Faris; 1874-1953)である。心理学に詳しいフェリスは、トマスの担当していた社会心理学の科目を引き継ぐのに好適であったし、7年間に及ぶアフリカでのキリスト教伝導活動を含めて、民族学にも広い関心をもっていた[Faris 1967: 30＝訳書58-59]。

トマスが担当していた科目は、おおよそ、社会心理学＝フェアリス、人種・民族＝パーク、犯罪・逸脱＝バージェスというように分担されていった。フェアリスが引き継いだものは、「社会の諸起源」「社会的態度」「アフリカにおける黒人」の3科目である。一方、トマスの「解体論」を引き継いだのは、「犯罪とその社会的処置」と1917年から「社会病理学」を担当していたバージェスである。この「社会病理学」は、近代社会における病理的状態・過程を概観するものであるが、視察旅行や調査課題、診療所への訪問が含まれるなど実習的内容をもつ。一方、パークは、1917年に「ヨーロッパ農民」から名称変更された「人種と国民性」を担当している。最後に、「調査コース」は、「社会心理学における調査コース」と名を変え、フェアリス、パーク、バージェスで担当することになった。

さて、第一期と第二期を画する上で大きな役割を果たしたのは、パークである。彼は、第一世代とは異なり、社会改革運動に対して常に懐疑的であり、アダムズとも距離をとった。パークは、「君もまた、あの忌々しい善意だけの社会改革家(do-gooder)か」と学生をやりこめたり、「道徳的な人間が社会学者になるのは、不可能だ」とまで言っていたという[Rauschenbush 1979: 96-97]。

1887年にミシガン大学を卒業したパークは、新聞記者をした後、1899年にハーバード大学で修士号を獲得、その後、ドイツに留学する。彼は、新聞の研究を続け、1904年、「群集と公衆」と題する論文でハイデルベルグ大学から博士号を取得する。1905年、アメリカに戻ってきたパークは、ワシントン(Booker T. Washington)と出会い、タスキーギ大学でアメリカ黒人の研究に着手する。パークがシカゴ大学に来るきっかけとなったのは、1910年に、タスキーギで開かれた黒人に関する国際会議でトマスと出会ったことである。トマスは、シカゴへ来るようにパークを説得した[Diner 1975: 532-533]。

このパークがシカゴ大学で最初に担当した科目は、1913年の「黒人の精神」であり、トマスの代理であった。翌年の1914年には、「社会心理学と人種心理学」グループに含まれ

る「群集と公衆」と「アメリカにおける黒人」の2科目を担当している。パークの博士論文のタイトルでもある「群集と公衆」は、様々なタイプの群集や非伝統的集団における心的な自動活動(mental automatism)の性質を根本的な形で定義することを目指した科目である。パークは、社会学を「集合行動の科学」と定義[Park and Burgess 1921: 42]し、集合行動論の祖と呼ばれる。1920年に、「集合行動への序論」という副題が付けられていることから分かるように、この科目は、アメリカにおける集合行動論の出発点となった。

パークが、いかに社会改革から距離をおこうとしていたかは、1910年代後半、シカゴ大学社会学部で同じく教壇に立っていたアボット(Edith Abbott; 1876-1957)との関係を見るとよく分かる。パークと同様に非常勤の特別講師であったアボットは、主にヘンダーソンが担当していた社会改革色の強い「社会技術」グループで、公式統計の利用を教える「社会調査(social investigation)の方法」[9]という科目を担当していた。ハルハウスで暮らしていたアボットは、ネブラスカ大学のロス(E.A. Ross)のもとで学部時代を過ごした後、シカゴ大学のブレッキンリッジ(Sophonisba Breckinridge)から大学院のトレーニングを受け、1905年、政治科学の博士号を得る。ハルハウスは、ロンドンのトインビーホール(Toynbee Hall)をモデルにしたとされるが、アボットもイギリスに渡り、ブース(Charles Booth)の助手としても活躍したベアトリス・ウェブ(Beatrice Webb)から同名の「社会調査の方法」という授業を受ける[Deegan 1991: 30]。ブースの「貧困調査」を範例とする調査方法を身につけてアメリカに帰ってきたアボットもまた、経験的調査を多数行った[ex. Abbott 1909; 1924; 1926; Abbott and Breckinridge 1917; cf. Deegan 1991]。

このアボットに対して、パークは、ブースの貧困調査やピッツバーグ調査に代表される社会的サーベイ運動(social survey movement)に対して批判的であった。彼は、アボットが「社会調査の方法」を開講した翌年の1915年、社会的サーベイ運動の調査方法と調査結果を批判的に検討しようという「サーベイ」[10]という科目を開講する。こうしたパークは、アボットから距離を取り、アボットの科目を履修しないように学生たちに言っていたという。ある学生は、パークが、「シカゴの町に最大の打撃を与えているものは、腐敗した政治家でも、犯罪者でもなく、女性の改革者たちだ」と言ったのを覚えていた[Bulmer 1984: 68]。

---

[9]「統計的資料を扱う実践的訓練を与えることと、社会的探索の分野において最も重要な作品を学生に熟知させることを意図している。社会問題に統計的方法を応用することを、公的報告や最も重要な民間の調査を用いて学ぶ」

[10]「社会的サーベイの利用と実践的な限界を定義する。社会学的データを分析・記述・提示するための技術的工夫を記述し、それらを実践的に用いてきた別の諸分野と比較する。そして、その諸成果の科学に対する価値と社会改革に対する価値を評価する」

社会改革と社会学の間に一線を画すために、パークは、「科学としての社会学」という主張を行っていく。その必要条件となるものが、自らの手による「一次資料の収集」であり、研究を方向付けデータを解釈する「理論枠組の整備」である。理論として重要なものは、一つには、パークとバージェス『科学としての社会学入門』[Park and Burgess 1921; cf. 吉田・寺岡 1997]のなかで展開された相互作用と社会的コントロールの理論であり、二つには、人間生態学の視点である。一方、一次資料の収集という点で重要なのは、パークとバージェスによる「フィールド調査」という授業科目である。

1920年よりパークとバージェスが教えた「社会研究入門」という授業科目は、学生たちの理論的洞察を鍛える上で重要な役割を果たした。この科目は、中級コースへ進むための必修科目であり、1920年の授業概要には、「学生に、社会科学における自らの位置づけと、社会について考える際に用いられる思考体系の教授を意図している。すなわち、人間性、社会と集団、孤立と社会的接触、相互作用の諸形態としてのコミュニケーション・模倣・暗示、社会的諸力と社会的統一、競争と闘争、応化と同化、社会的コントロールと社会過程。人口移動・移民・人種偏見・貧困・犯罪のような諸問題に対する社会的概念の応用」と説明されている。この内容は、まさに、「グリーンバイブル」と呼ばれ、社会学を志したものならば誰でも目を通したといわれる教科書『科学としての社会学入門』の章立てに沿ったものである。1916年から1919年までの期間、ベッドフォード(Scott E. W. Bedford)とバージェスが、この「社会研究入門」[(11)]を教えていた。その頃と比較すると、1920年以降、この授業の焦点が、具体的・個別的な諸問題から、より抽象的・普遍的な理論へと移ったことが読みとれる。

また、1925年になると、シカゴ学派の都市研究の理論的枠組と言われる「人間生態学」[(12)]の科目が新設される。この科目の担当は、パークと、1925年の夏、ワシントン大学よりシカゴ大学へ来ていたマッケンジーである。この1925年前後は、シカゴ学派の都市研究における人間生態学的な視点が確立した時期である[cf. 原田 1997]。1925年、初期シカゴ学派の都市社会学に関する代表的論文[Park 1915; Burgess 1924; McKenzie 1924]を収録した『都

---

(11) 1917年の授業概要の説明「学生に、社会科学における自らの位置づけと、社会について考える際に用いられる思考体系の教授を意図している。すなわち、社会における地理的・生物的要因、人口の供給と保持、人口移動・移民、家族・その形態と問題、女性の地位と子どもの権利、社会的諸力と社会的統一、個人の集団に対する関係、教育・宗教・社会的圧力による社会的コントロール、犯罪・貧困・慈善・博愛事業、社会過程と社会改革、社会の一般的理論」

(12)「コミュニティの位置と成長を決定する地理的・経済的要因。コミュニティの類型、商業と市場地域、運輸通信形態の変化の重要性、人口淘汰、棲み分け。コミュニティの構造。公共施設と住民の配分と棲み分け。コミュニティの問題を研究する背景。」

市』[Park, Burgess and McKenzie 1925]が刊行される。一方、カリキュラムに目を向ければ、1926年からバージェスが、「都市の成長」(13)という学部生向けの科目を新設している。(14)

それでは、一次資料の収集という側面を見ていこう。学生たちを、シカゴというフィールドへといざなったのもまた、パークとバージェスである。1917年に新設された彼らの担当の「フィールド調査」という授業科目には、次のような説明が付されている。「シカゴという都市の都市部地域や郊外地域の内部における、人口の移動・地域的分配・棲み分け。多様な階級、人種的・職業的・地域的集団の文化的相違と相対的孤立。例えば、家族・教会などに帰着する変化。娯楽の諸形態における余暇時間の利用。世論の組織化と表出、社会的コントロールの伝統的形態」。しかし、この概要には、この科目の雰囲気があまり反映されていないという。受講した学生は、数回の序論的な講義を受けた後、選択したトピックにそってデータを集めるよう町に送り出された。学生たちは、インタビューを行ったり、集会に参加したり、スポット・マップを作っていった。このように、実際に調査を行うことが、パークやバージェスの担当した授業科目の特徴である。この「フィールド調査」で発表するために集められたデータは、学期末のレポートとなり、博士論文のテーマとなるものもあった。このようなゼミナールと実習の要素をあわせもった大学院教育プログラムは、ドイツの高等教育の影響を受けたものである。[Bulmer 1984: 95-96]

しかも、パークとバージェスの指導は、授業というフォーマルな場にとどまらなかった。彼らは、ゼミナールにおける教育と個人的指導の区別を明確にせず、ハイナー(Norman Hayner)の日記に書かれているように[Faris 1967: 79-82＝訳書120-125]、個別的に学生を調査地に連れて行くなど学生の面倒を熱心に行った[Bulmer 1984: 96-97]。また、多くの場合、教員たちは、大学の近所に住んでおり、長い時間、大学の研究室で過ごしていた。授業という場を越えて、学生たちが、先生とコミュニケーションをとることは、当時のシカゴ大学においては、大変容易だったのである[Shils 1980: 216]。

教員と学生、卒業生の間のつながりを親密にする上で、重要な働きをしたのが、社会調査の会(Society for Social Research)である。1920年にパークを初代会長として発足したこの会は、「広範な関心を刺激し、地域コミュニティの調査に焦点を定めた研究プログラムに

---

(13)「人口の配分と移動、都市地域におけるコミュニティの形成を決定する生態学的要因の考察。」

(14)それまで、都市社会学に関する科目を教えていたのは、ベッドフォードである。彼は、1902年から1905年までカンザス州のベイカー大学で歴史の教授を務め、1908年から1911年までシカゴ大学社会学部でフェロー、1911年から教授陣に加わっている。ベッドフォードは、独自に調査を行なったわけではないが、彼の授業と著作[ex. Bedford 1927]は、シカゴ大学における都市に対する社会学的関心を強固なものにする役割を果たしたと言われている[Diner 1975: 531]。

おいて、教員と学生の間により知的な協同を促進すること」を目的としている。この会の主な活動は、(1)定期的な夜間ミーティング、(2)夏期研究会、(3)会報、の三つである。このうち、夜間ミーティングは、二週間から四週間おきに行われ、大学外の専門家や、社会学以外の学者が講演を行ったり、大学院生が自分の調査結果を発表する場であった。学生たちは、正規の授業にはない刺激を、この夜間ミーティングから受けた。専門以外の興味深い話もさることながら、この夜間ミーティングにおける研究発表への批評は、痛烈さを極めていたと言われる。一方、1923年から毎年行われていた夏期研究会は、卒業生たちのネットワークを維持する一手段となっていた。会員たちの近況報告を掲載した会報もまた、シカゴ社会学にかかわる人びとの結束を強めたという[Bulmer 1984: 114-117]。

以上のような、パークとバージェスの研究・教育プログラムを、とりわけ財政的な面で支えていたのが、地域コミュニティ調査委員会(Local Community Research Committee)である。21000ドルの基金を得たシカゴ大学の社会科学系学部は、この委員会を1923年に設立した。初年度、社会学部は、全体の40%にあたる8500ドルを獲得する。このうち、2000ドルは統計と事務の援助に費やされ、5000ドルは調査の補助に、1400ドルは調査を行う教員が授業の義務から解放されるために用いられた。こうしたお金の大部分は、大学院生や事務員の人件費や奨学金に使われたという[Bulmer 1984: 138-139]。

この地域コミュニティ調査委員会の設立による人的・財政的援助を背景に、社会学における調査も新しい時代に入る。社会調査の傾向は、社会学者が単独で行う比較的小規模の調査から、多数の人びとを組織化した大規模な経験的調査へと移っていった。一方、大学院生たちは、調査プロジェクトの一員として実際に調査に参加し、調査助手として収入を得ると同時に、調査技術についてもトレーニングを受けることになった。地域コミュニティ調査委員会は、教員と学生の双方にとって、調査に専念できる環境を生み出すとともに、大学院生の教育においても大きな役割を果たしたのである。

4　第三期：オグバーンによる統計法の進展

「測定が不可能であるとき、その知識は、貧弱で不十分である。ケルビン卿」。1929年、新しく完成した社会科学棟に刻まれた碑文が、オグバーンによって選定された上記の文句である。1910年代後半に、社会改革の流れから離脱したシカゴ大学社会学部は、その10年後、科学の名のもとに、いっそうの方法論的厳密性を追求していくことになる。その一つの表れが、統計教育の重視であった。

もちろん、オグバーンの赴任以前も、統計法は教育されていた。既に述べたように、アボットは、1914年に、既存の公式統計を用いる方法を教授する「社会調査の方法」を開講し、さらに、1918年には、「社会統計」(15)という科目を新設している。また、統計法に常に懐疑的であったパークとは対照的に、バージェスは、統計法が、科学的な社会学の確立に不可欠なものと見なしていた。彼は、都市の統計データを集めることによってのみ、都市という実験室において、自然科学と同様に、観察と実験をコントロールできると考え、シカゴのセンサス・データの整備に尽力する[Bulmer 1984: 155-163]。

しかし、より重要なのは、政治経済学部のフィールド(James A. Field)による統計科目である。社会学部の学生たちは、1911年から、フィールドの科目を受講するように指導されていた。彼の統計法の入門科目では、単純な記述統計と連関に関する初歩的な考え方が扱われている。そして、この入門科目は、地図やダイヤグラム、作表など統計的な提示法を扱う別の科目によって補足され、さらに上級の科目では、ピアソンの相関係数とともに、確率論、単純サンプリング、正規分布、推測の論理などが教えられていた。しかし、マウラー(Ernest Russell Mowrer)の回想では、社会学の学生で、フィールドの統計科目のすべてを受講していたのは、彼一人だけであったという。[Bulmer 1984: 163-164]

1926年にスモールとベッドフォードが抜けた穴を埋め、シカゴ大学社会学部の弱点であった統計的分野を強化するために、オグバーンが、1927年、コロンビア大学からシカゴ大学に赴任する。彼は、20世紀初頭にコロンビア大学のギディングス(Franklin Henry Giddings; 1855-1931)のもとで訓練を受け、同時に、経済学者のモーア(Henry L. Moore)から統計学を学ぶ。彼は、「文化遅滞」(cultural lag)[Ogburn 1922]の概念でよく知られているが、政治行動・生活水準・家族に関する量的な研究においてもまた有名である[Bulmer 1984: 170]。

オグバーンのシカゴ大学赴任には、次のような事情が関わっていた。まず、オグバーン側の事情としては、コロンビア大学の研究体制の貧弱さがあげられる。量的研究は、自然科学と同様に、多大な人的・財政的援助を必要とするが、コロンビア大学は、オグバーンの望む研究体制を作り上げることができなかった。彼にとって、シカゴ大学の地域コミュニティ調査委員会が提供する研究体制は、大変な魅力であった。一方、シカゴ大学側の事情としては、一つに、弱点である統計的な分野の強化と、二つに、社会学の大学院教育におけるトップの地位を維持しようという意図があげられる。統計的な分野が弱点であると

---

(15)「この科目は、社会問題に関する統計資料や、人口動態統計、生活保護者・犯罪・心身障害者・移民・失業の統計を収集し、解釈する実践的なトレーニングを与えることを企図している。社会組織のケースレコードとファイルを提示し、解釈する方法を扱う予定である。」

いうことは、当時、シカゴ大学の教員たちの一般的な認識であった。その頃のシカゴ大学の方法論的嗜好は、おそらく、トマスからパークへと受け継がれた質的方法であっただろう。それにもかかわらず、量的方法を得意とするオグバーンがシカゴ大学へ招かれたのは、当時、あらゆる分野で発展していた統計的方法をシカゴ大学に取り込むことが、アメリカ社会学界におけるシカゴ大学の主導的地位を維持する有効な手段になるという判断があったためである[Bulmer 1984: 170-171]。社会学部の学生がそれまで統計学を学んでいたフィールドが1927年に死亡したことも、オグバーンの赴任を促進した[Bulmer 1984: 163]。

オグバーンの担当した科目は、カリキュラムの中にあって相当な存在感を示している。まず、第一グループの「一般社会学：社会科学の歴史と論理」には、新しく「調査の方法」というセクションが設けられる。そこに含まれる科目は、オグバーンの担当した「統計入門」「統計的方法」「統計の諸問題」の3つである。年度始めの秋学期に開講される「統計入門」の説明には、「社会学的データの収集・作表・分析の方法、質問票、度数分布、グラフによる統計量の提示・挿入・解釈。まず、サンプリングについて考え、各種の統計的誤謬と、統計家の仕事の多様な実際的局面について批判的に考察」とある。続いて、冬学期の「統計的方法」では、「変異性、平衡、相関の理論の研究、および、その利用と特別な展開。誤差の理論」が教えられている。最後に、春学期の「統計の諸問題」の説明は、「サンプリング、曲線の当てはめ、傾向線の決定、周期的・季節的偏差。授業の出席者の関心に基づいて選ばれるその他の問題」となっている。

「調査の方法」というセクション以外にも、多くのオグバーンの科目が新設されている。まず、他の社会科学や自然科学などとの比較から社会学の独自性を検討する「社会学と社会科学」、次に、社会学における文化の重要性を研究する「文化と社会学」、文化の成長と社会変動の性質を研究する「社会変動」、マルサスの人口理論を取り扱う「人口と社会」、階級・人種などにおける人口の特質に関する理論とそれらの統計的研究を行う「人口の社会的特質」、経済的要因に重点をおいて社会現象の社会的要因を数量的に分析する「社会的条件と経済的要因」、賃金・生活費・生活水準・物価変動などの統計調査を行う「社会的不適応の統計」と非常に多岐にわたっている。これは、統計学を、ただ学ぶだけでなく、様々な領域に応用していこうという社会学部の意欲を表していると言えるだろう。同時に、オグバーンに対する期待の大きさを示しているとも言えよう。1940年にオグバーンが社会学部長に就任したことからも、こうした流れが、その後の主流となっていくことがうかがえる。

むすびにかえて

最後に、こうしたシカゴ大学社会学部のカリキュラムにおける三つの時期に共通する特徴を指摘しておきたい。それは、直接的観察に基づく経験的な理解に対する強いこだわりである。シカゴ大学教育学部に付属実験学校を開設したプラグマティズム哲学のデューイは、「何かを実際にやることで学ぶ」(Leaning by Doing)という言葉を残している。まさに、これと同一の精神が、社会学部の教育においても流れているように思われる。シカゴ大学社会学部における教育は、論理演繹型の誇大理論をもてはやすようなことはなく、何よりもまず、社会の現実を自らの目と手で触れることから始まるのである。スモールは、直接的観察の重要性を説いた。トマスは、大量の一次資料を収集した。パークとバージェスは、学生たちを積極的にフィールドにいざなった。オグバーンは、データに基づく理論の検証を重視した。1954年にシカゴ大学で博士号を取得したガスフィールド(Joseph R. Gusfield)は、こうしたシカゴ大学の雰囲気を、巧みな比喩を用いて次のように語っている。

> われわれは、次のようによく言ったものである。ハーバードの学生によって書かれた飲酒についての論文ならば、きっと「西欧社会システムにおける文化的解放の諸様式」とタイトルを付けるだろう。コロンビアの学生ならば、タイトルを「全国標本におけるアルコール利用の潜在的機能」とすることだろう。そして、シカゴの学生ならば、「ジミーズにおける社会的相互作用：ある55番通りの酒場」とタイトルを付けるに違いない、と。彼／彼女が直に見聞き経験した事柄に対して、学生たちを堅く固執させるのが、一つの方法論だったのである。具体的な観察をともなう経験に基づかない抽象や概念は、疑念の目を向けられた。（中略）わたしは、タルコット・パーソンズが、（キャンパスの）マンデル・ホールにおける講義で、自らの理論的パースペクティブをプレゼンテーションをしたのを、初めて聞いたときのことを覚えている。その講義で、パーソンズは、ルイス・ワースによって紹介された。ワースは、それから、最前列に座り、パーソンズ教授のプレゼンテーションの間、自分のところに来た郵便物を読み始めたのだ！[Galliher 1995: 183]

TABULAR VIEW OF COURSES OFFERED BY THE DEPARTMENT OF SOCIOLOGY, 1905-06

	Summer. 1905	Autumn. 1905	Winter. 1906	Spring. 1906
8:30		18. Physical Anthropology (Dorsey) 26. Social Origins (Thomas) 72. An Introduction to Sociology (Vincent)	24. Art and the Artist Class (Thomas) 73. Public Opinion (Vincent)	23. Ethnography (Dorsey) 52A. Development and Organization of the Press (Vincent)
9:30		27. Mental Development in the Race (Thomas) 94. Survey of General Sociology (Small)	32. The Negro in Africa and America (Thomas) 95. The Conflict of Classes in Modern Society (Small)	96. The Ethics of Sociology (Small)
10:30	15. The Pueblo Indians of New Mexico (Starr) 26. Social Origins (Thomas) 54. The Labor Movement Historically and Critically (Taylor) 67B. The Elements and Structure of Society (Zueblin)(1906)			
11:00		5. The American Race (Starr) 14. Japan (Starr) 42. House Sanitation (Talbot) 51. Contemporary Society in the United States (Vincent) 53. The Family (Henderson)	43. Food Supplies and Dietaries (Talbot) 52. American Cities (Vincent) 100. Organization of Religious Education (Henderson)	10. Mexico (Starr) 44. Administration of the House (Talbot) 56. The Group of Industrials (Henderson) 64. Contemporary Charities (Henderson) 67A. The Economic Basis of Society (Zueblin) 71. An Introduction to the Study of Society (Vincent)
11:30	27. Mental Development in the Race (Thomas) 67C. The Implications of Democracy (Zueblin)(1906)			
12:00	1. General Anthropology (Starr)	63. Ecclesiastical Sociology (Henderson) 79. Social Forces in Modern Democracy: United States (Small)	61. Urban Communities (Henderson) 68. Philanthropy in its Historical Development (Henderson) 80. Social Forces in Modern Democracy: England (Small)	1. General Anthropology (Starr) 70. Municipal Sociology (Zueblin) 81. Social Forces in Modern Democracy: France and Germany (Small)
2:00		7. Physical Anthropology--Laboratory Work--(Starr) 20. Physical Anthropology (Dorsey)	8. Physical Anthropology--Laboratory Work--(Starr) 21. Physical Anthropology (Dorsey)	9. Physical Anthropology--Laboratory Work--(Starr) 22. Physical Anthropology (Dorsey)
3:00		45. Modern Problems in Household Administration, Tu., Th., 3:00-5:00 (Talbot)	46. Modern Problems in Household Administration, Tu., Th., 3:00-5:00 (Talbot)	47. Modern Problems in Household Administration, Tu., Th., 3:00-5:00 (Talbot)
4:00		58. Seminar: Methods of Social Amelioration, Th., 4:00-6:00 (Henderson)	59. Seminar: Methods of Social Amelioration, Th., 4:00-6:00 (Henderson)	60. Seminar: Methods of Social Amelioration, Th., 4:00-6:00 (Henderson)
Hours to be arranged	101. Social Psychology (Ross) 102. The Social Processes (Ross)	11. Laboratory Work in Anthropology (Starr) 82. Seminar: Present Problems in General Sociology (Small)	12. Laboratory Work in Anthropology (Starr) 83. Seminar: Present Problems in General Sociology (Small)	13. Laboratory Work in Anthropology (Starr) 84. Seminar: Present Problems in General Sociology (Small)

TABULAR VIEW OF COURSES OFFERED BY THE DEPARTMENT OF SOCIOLOGY, 1921-22

	Summer, 1921	Autumn, 1921	Winter, 1922	Spring, 1922
8:00	1. Introduction to the Study of Society 6. Modern Cities (-----) 36. The Social Survey (Park)	1. Introduction to the Study of Society Sec. a (-----) 7. Social Pathology (Burgess)	1. Introduction to the Study of Society Sec. a (-----) 6. Modern Cities (Bedford) 45. Races and Nationalities (Park)	1. Introduction to the Study of Society Sec. a (-----) 51. Crime and Its Social Treatment (Burgess)
9:00	1. Introduction to the Study of Society 2. Introduction to Social Psychology (Faris) 19A. General Sociology (Bodenhafer)	1. Introduction to the Study of Society Sec. b (-----) 3. Social Origins (Faris) 10. The Family (Burgess)	1. Introduction to the Study of Society Sec. b (-----) 2. Introduction to Social Psychology (Faris) 50. Municipal Sociology (Bedford)	1. Introduction to the Study of Society Sec. b (-----) 3. Social Origins (Faris) 10. The Family (Burgess)
10:00	20A. Development of Sociology in the United States (Bodenhafer) 30. Social Attitudes (Faris) 103. The Peoples of the Congo Free State (Starr)	1. Introduction to the Study of Society Sec. c (-----) 31. Social Control (Faris) 100. Mexico (Starr)	1. Introduction to the Study of Society Sec. c (-----) 30. Social Attitudes (Faris) 101. Japan (Starr)	1. Introduction to the Study of Society Sec. c (-----) 33. The Mind of Primitive Man (Faris) 91. Prehistoric Archaeology (Starr)
11:00	37. The Crowd and the Public (Park) 90. Prehistoric Arhchaeology (Starr)	80. General Anthropology (Starr)	38. The Newspaper (Park) 82. Ethnology (Starr)	92. The American Race (Starr)
12:30		1. Introduction to the Study of Society Sec. d (-----)	1. Introduction to the Study of Society Sec. d (-----)	1. Introduction to the Study of Society Sec. d (-----)
1:30	1. Introduction to the Study of Society 7. Social Pathology (Burgess)	1. Introduction to the Study of Society Sec. e (-----) 6. Modern Cities (Bedford)	1. Introduction to the Study of Society Sec. e (-----) 34. Play and the Social Utilization of Leisure Time (Burgess)	1. Introduction to the Study of Society Sec. e (-----) 6. Modern Cities (Bedford)
2:30	1. Introduction to the Study of Society 51. Crime and Its Social Treatment (Burgess)	16A. History of Sociology from the Beginning of the Nineteenth Century (Small) 27. Seminar: The Sociology of Property (Small)	7. Social Pathology (Burgess) 15. Elements of General Sociology (Small) 28. Seminar: The Sociology of Property (Small)	17. Conflict of Classes in Modern Society (Small) 29. Seminar: Sociology of Property (Small)
3:30	79. Teaching of Sociology in Colleges (Park, Burgess, Faris)		68. Research Course in Social Psychology (Faris, Park, Burgess)	
Hours to be arranged		76. Field Studies (Park, Burgess)	77. Field Studies (Park, Burgess)	78. Field Studies (Park, Burgess)

TABULAR VIEW OF COURSES OFFERED BY THE DEPARTMENT OF SOCIOLOGY, 1930-31				
	Summer, 1930	Autumn, 1930	Winter, 1931	Spring, 1931
8:00	110. Introduction to the Study of Society Sec. a (Blumer) 343. Human Migrations (Park)			361. Human Ecology (Park)
9:00	110. Introduction to the Study of Society Sec. b (Blumer) 303. Introduction to Statistics (Stouffer)	110. Introduction to the Study of Society Sec. a (Blumer) 220. Introduction to Social Psychology (Faris)	110. Introduction to the Study of Society Sec. a (Blumer) 230. Social Origins (Faris) 351. The Family (Burgess)	101. Survey of Sociology and Anthropology (Faris and Members of the Departments) 110. Introduction to the Study of Society Sec. a (Blumer)
10:00	110. Introduction to the Study of Society Sec. c (Cressey) 351. The Family (Young)	110. Introduction to the Study of Society Sec. b (Blumer) 270. Social Pathology (Burgess) 340. Population and Society (Ogburn)	110. Introduction to the Study of Society Sec. b (Blumer) 341. Social Characteristics of Population (Ogburn)	110. Introduction to the Study of Society Sec. b (Blumer) 342. Social Conditions and Economic Factors (Ogburn)
11:00	326. The Crowd and the Public (Park)	303. Introduction to Statistics (Ogburn)	264. The Growth of the City (Burgess) 304. Statistical Methods (Ogburn)	305. Statistical Problems (Ogburn) 343. Human Migrations (Park)
1:30	110. Introduction to the Study of Society Sec. d (Cressey) 365. Rural Sociology (McCormick) 373. Crime and Its Social Treatment (Young)	110. Introduction to the Study of Society Sec. c (-----)	110. Introduction to the Study of Society Sec. c (-----)	110. Introduction to the Study of Society Sec. c (-----)
2:30	220. Introduction to Social Psychology (McCormick)	110. Introduction to the Study of Society Sec. d (-----)	110. Introduction to the Study of Society Sec. d (-----)	110. Introduction to the Study of Society Sec. d (-----) 416. Seminar: Modern French Sociology, Th., 2:30-4:30 (Faris)
3:30		423. Seminar: Human Nature, Tu., 3:30-5:30 (Faris)	424. Seminar: Human Nature, Tu., 3:30-5:30 (Faris)	425. Seminar: Human Nature, Tu., 3:30-5:30 (Faris)
4:30		310. The Study of Society (Burgess)		
7:30				373. Crime and Its Social Treatment, M., W., 7:30-9:30 (Burgess)
Hours to be arranged	406. Research in Quantitative Sociology (Ogburn) 441. Special Research (Blumer)	267. Individual Study Project (Burgess) 297. Honors Course 407. Research in Quantitative Sociology (Ogburn) 427. Research Problems in Social Psychology (Faris) 467. Field Studies (Park, Burgess) 477. Research in Criminology (Sutherland)	268. Individual Study Project (Burgess) 298. Honors Course 408. Research in Quantitative Sociology (Ogburn) 428. Research Problems in Social Psychology (Faris) 468. Field Studies (Park, Burgess) 478. Research in Criminology (Sutherland)	269. Individual Study Project (Burgess) 299. Honors Course 352. Family Case Studies (Burgess) 409. Research in Quantitative Sociology (Ogburn) 429. Research Problems in Social Psychology (Faris) 469. Field Studies (Park, Burgess) 479. Research in Criminology (Sutherland)

参考文献

Abbott, Edith. 1909. *Women in Industry: A Study in American Economic History*. D. Appleton.

Abbott, Edith. 1924. *Immigration: Select Documents and Case Records*. University of Chicago Press.

Abbott, Edith. 1926. *Historical Aspects of the Immigration Problem: Select Documents*. University of Chicago Press.

Abbott, Edith and Sophonisba P. Breckinridge. 1917. *Truancy and Non-attendance in the Chicago Schools: A Study of the Social Aspects of the Compulsory Education and Child Labor Legislation of Illinois*. University of Chicago Press.

Bedford, Scott E. W. (ed.) 1927. *Readings in Urban Sociology*. D. Appleton.

Bulmer, Martin. 1984. *The Chicago School of Sociology: Institutionalization, Diversity, and the Rise of Sociological Research*. University of Chicago Press.

Burgess, Ernest W. 1924. "The Growth of the City: An Introduction to a Research Project." *Publications of the American Sociological Society* 18 (Annual): 85-97.

Burgess, Ernest W. 1926. "The Family as a Unit of Interacting Personalities." *The Family* 7: 3-9.

Burgess, Ernest W. and H. J. Locke. 1945. *The Family: From Institution to Companionship*. American Book.

Cavan, Ruth Shonle. 1983. "The Chicago School of Sociology, 1918-1933." *Urban Life* 11(4): 407-420.

Deegan, Mary Jo. 1988. *Jane Addams and the Men of the Chicago School, 1892-1918*. Transaction Books.

Deegan, Mary Jo (ed.) 1991. *Women in Sociology: A Bio-bibliographical Sourcebook*. Greenwood Press.

Diner, Steven J. 1975. "Department and Discipline: The Department of Sociology at the University of Chicago, 1892-1920." *Minerva* 13 (Winter): 514-553.

Faris, Robert E. L. 1967. *Chicago Sociology: 1920-1932*. Chandler Publishing Company.（奥田道大・広田康生訳 1990『シカゴ・ソシオロジー 1920-1932』ハーベスト社）

Fine, Gary Alan (ed.) 1995. *A Second Chicago School?: The Development of a Postwar American Sociology*. University of Chicago Press.

Galliher, John F. 1995. "Chicago's Two Worlds of Deviance Research: Whose Side are They On?" Fine (ed.) 1995: 164-187.

原田隆司 1997「人間生態学の胎動：ロドリック・D・マッケンジー『近隣：オハイオ州コロンバス市における地域生活の研究』」宝月・中野編 1997: 209-250.

宝月誠・中野正大編 1997『シカゴ社会学の研究：初期モノグラフを読む』恒星社厚生閣

Janowitz, Morris. 1966. "Introduction" *W.I. Thomas, On Social Organization and Social Personality*. edited by Morris Janowitz. University of Chicago Press.

McKenzie, Roderick. 1924. "The Ecological Approach to the Study of the Human Community." *American Journal of Sociology* 30 (November): 287-301.

Ogburn, W. F. 1922. *Social Change: With Respect to Culture and Original Nature*. B. W. Huebsch.（雨宮庸蔵・伊藤安二訳 1944『社会変動』育英書院）

Park, Robert E. 1915. "The City: Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the City Environment." *American Journal of Sociology* 20: 577-612.

Park, Robert E. 1929. "The City as Social Laboratory." Smith, T. V. and L. D. White (eds.) *Chicago: An Experiment in Social Science Research*. University of Chicago Press.: 1-19.（町村・好井編訳 1986: 11-35.）

Park, Robert E. and Ernest Watson Burgess. 1921. *Introduction to the Science of Sociology*. University of Chicago Press.

Park, Robert E.（町村敬志・好井裕明編訳 1986『実験室としての都市：パーク社会学論文選』御茶の水書房）

Park, Robert E., Ernest W. Burgess and Roderick D. McKenzie. 1925. *The City*. University of Chicago Press.（大道安次郎・倉田和四生訳 1972『都市』鹿島出版会）

Raushenbush, Winifred. 1979. *Robert E. Park: Biography of a Sociologist*. Duke University Press.

Residents of Hull-House. 1895. *Hull-House Maps and Papers*. Crowell.

Shils, Edward. 1980. *The Calling of Sociology and Other Essays on the Pursuit of Learning*. University of Chicago Press.

Small, Albion W. 1896. "Scholarship and Social Agitation." *American Journal of Sociology* 1(5): 564-582.

Small, Albion and George Vincent. 1894. *An Introduction to the Study of Society*. American Book Company.

Thomas, W. I. and F. Znaniecki. 1918-1920. *Polish Peasant in Europe and America*. Badger.（桜井厚部分訳 1983『生活史の社会学：ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』御茶の水書房）

吉田竜司・寺岡伸悟 1997「シカゴ学派成立のマニフェスト：ロバート・E・パーク、アーネスト・W・バージェス『科学としての社会学入門』」宝月・中野編 1997: 95-130.

資料リスト

The Annual Register of The University of Chicago, 1904-1905

The Annual Register of The University of Chicago, 1906-1907

The Annual Register of The University of Chicago, 1907-1908

The Annual Register of The University of Chicago, 1908-1909

The Annual Register of The University of Chicago, 1909-1910

The Annual Register of The University of Chicago, 1910-1911

The Annual Register of The University of Chicago, 1911-1912

The Annual Register of The University of Chicago, 1912-1913

The Annual Register of The University of Chicago, 1913-1914

The Annual Register of The University of Chicago, 1914-1915

The Annual Register of The University of Chicago, 1915-1916

Circular of the Departments of Political Economy, Political Science, History, Sociology and Anthropology, 1917

Circular of the Departments of Political Economy, Political Science, History, Sociology and Anthropology, 1918-19

Circular of the Departments of Political Economy, Political Science, History, Sociology and Anthropology, 1919-20

Circular of the Departments of Political Economy, Political Science, History, Sociology and Anthropology, 1920-21

Circular of the Departments of Philosophy, Psychology, Education, Political Economy, Political Science, History, Sociology and Anthropology, 1921-22

Circular of the Departments of Philosophy, Psychology, Education, Political Economy, Political Science, History, Sociology and Anthropology, 1922-23

Circular of the Departments of Philosophy, Psychology, Education, Political Economy, Political Science, History, History of Art, Sociology and Anthropology, 1923-24

Announcements: The Departments of Philosophy, Psychology, Education, Political Economy, Political Science, History,

Sociology and Anthropology, 1924-25. Vol.24, No.13, March 25, 1924

Announcements: The Departments of Philosophy, Psychology, Education, Political Economy, Political Science, History, Sociology and Anthropology, Home Economics and Household Administration, 1925-26. Vol.25, No.20, April 25, 1925

Announcements: The Graduate Schools and Colleges of Arts, Literature, and Science. Vol.26, No.21, May 5, 1926.

Announcements: The Graduate Schools and Colleges of Arts, Literature, and Science. Vol.27, No.21, May 5, 1927.

Announcements: The Graduate Schools and Colleges of Arts, Literature, and Science. Vol.28, No.23, May 5, 1928.

Announcements: The Colleges and Graduate Schools of Arts, Literature, and Science. Vol.29, No.25, May 25, 1929.

Announcements: The Departments of Philosophy, Psychology, Education, Economics, Political Science, History, Sociology and Anthropology, 1930-31. Vol.30, No.18, March 15, 1930

謝辞：　本研究は、平成１０年度科学研究費「シカゴ学派の総合的研究」（基盤研究(B)(1)、課題番号10410045、研究代表者：中野正大）から資料その他において多くの便宜を受けた。記して、感謝の意を表したい。

（たかやま　りゅうたろう・博士後期課程）

The Early Chicago School from the Viewpoint of Curriculum: From 1905 to 1930

Ryutaro TAKAYAMA

The purpose of this paper is to examine the curricula of the department of sociology of the University of Chicago from 1905 to 1930. The material in this paper is derived mainly from the announcements for students about the contents of subjects offered by the department of sociology. It is concluded that the curricula can be classified into three periods.

The first period is from 1905 to 1918. Albion W. Small, the first head of the department, adopted the policy of education that students should learn the reality of society by participating in the activities of the social reforms such as Hull-House made by Jane Addams. William I. Thomas, who was also among the first generation of the Chicago School and one of the most important sociologists of his day, was fired from the University of Chicago, largely due to his political activities. This event led to the end of the first period. The second period is from 1919 to 1926. Robert E. Park and Ernest W. Burgess, who were among the second generation and were said to have established the foundation of the School, had to distinguish between sociology and social reform. They emphasized "first-hand data collection" and "scientific theoretical framework." They took their students to various areas in Chicago for the purpose of field research . The third period is from 1927 to 1930. In 1927, William F. Ogburn at Columbia came to Chicago in order to strengthen the quantitative side of the department's work. From 1927 onward, the department gave more significance to the rigidity of methodology by teaching statistical methods.

It should also be added that there is a common feature through the periods. Teachers held the students firmly to what he/she could see, hear, and experience at first-hand. It is this feature that distinguishes the education at Chicago from the one at Harvard or Columbia.